万葉の面白さ

土橋寛

1

文学が面白いというのは、読者が作品の世界を理解し、さらに共鳴することであり、しかもそれが未知の世界である場合には驚きの心持が加わって、共鳴は感動にまで高まる。この時文学はもっとも面白い、ということになるであろう。現代の文学は、したがって一番面白い。作品の中に描かれているのは、われわれと同じ現代社会に生きて、われわれと同じような生活をしている人間であり、そこの中の問題はわれわれにとっても切実な問題だからである。

ところが古典文学の世界は、何十年か何百年か過去の社会の中に生きていた人間が描かれている。社会制度も違えば、人間の思想も感情も違うし、そこに描かれている問題は、われわれの問題とは、ずれている。また万葉とか、源氏とか、近松とか、われわれはある程度その内容を常識的に知っているから、いまさら驚きを感ずるようなこともない。おまけに言葉がむずかしい。――結局古典は面白くない、というのが多くの人々の気持であろう。そしてそれは当然だと、私も一応は考える。

しかし古典が文学である限り、現代文学と同様に、人間の問題を扱っている筈である。恋とか、子に対する愛とか、生活の悩みとか、そういう人間の問題が主題になっているのは古典文学も同じであり、そこに古典がわれわれによって無縁の存在でない理由がある。しかし人間を取りまく社会的な還境が違い、従ってものの考え方も違うのであって、一人の人間の中に、人間としての自己主張と共に、その時代その時代のものの考え方（思想、世界観）が同時に存在していて、それは烈しい矛盾として対立しあっていることさえ珍しくない。それをどのように統一するか、ということが古典文学の切実な主題で、その統一のし方は、今日のわれわれとは違っているかもしれないが、人間の問題をそ

の時代のいろいろな制約又は対立的なものとの関係において、（それは闘いと云ってもいいであろう）具体的に生き生きと描いているところに、古典が今日のわれわれにも訴えてくる力がある。なぜならば、人間に対する制約や対立物は、今日でも、昔とは違った性質のものとして存在し、われわれはそれとの闘いに苦しんでいるのであるから。古典の世界の主人公たちも、われわれと同じように敵との闘いに血みどろになって闘っている。ただ敵がわれわれの敵と必ずしも同じでないというだけである。古典文学が現代の人間にとっても、無縁でないというのは、そういう意味である。一つの例をとってみょう。例えば歌舞伎の寺小屋について考えてみると、ここでは松王夫婦が、恩義のある菅丞相の遺子菅秀才の命を時平の凶刃から守るために、自分の子小太郎を身代りに差出して、首尾よく成功するという筋であり、一応簡単に忠義のために子への愛を犠牲にする行為として要約することができる。これが封建的な世界観に立つものであることは言うまでもなく、今日のわれわれの思想とは相容れないものであるが、そういう芝居を見て、われわれは決してばかばかしい感じを受けるどころか、むしろ感動する。これはいったい我々の中に、まだ封建的な忠義思想が残っているからであろうか。

これは芝居そのものについて見ればすぐ分かることであるが、松王夫婦が忠義か愛かを簡単に割り切って忠義を選んだのでないことは、小太郎が殺された後で千代がなげく台詞の中にもよく出ている。忠義か愛かの二者択一を迫られるという絶体絶命の場に立たされた松王夫婦の苦悶は、それ自身としてではなく、小太郎が身代りにされてしまった後で、千代の台詞と演技の中に表現されるわけであるが、それでもその苦しみは十分感動を呼び起こすだけの力をもっている。もしもこれが簡単に愛を捨てて忠義を選んだのであるならば、われわれはばかばかしいと思うだけであろうし、のみならず徳川時代の観客もとうてい共感を感ずることはなかったであろう。そんなものは「文学」ではありえないからである。ただ、同じ寺小屋でも江戸時代の作者や観客と、現代のわれわれとの間には少しズレはあるかもしれない。原作の浄瑠璃ではどちらかというと、忠義の方に重点が置かれていて、千代の嘆きの方はあまり強く描かれていないのを見ると、子への愛を犠牲にして忠義を選んだ武士としての、悲しいあっぱれな行為に作者も焦点を置き、観客もそこに感動したのであろう。しかし先年の前進座で上演した歌舞伎では、千代の嘆きの方が一層強く押出されていたようで、われわれはこのような脚色を肯定し、千代の嘆きという形で表現される子への愛の側から、むしろ感動を受けているように思う。そういうズレがあることは確かであるが、大事なことは、原作でたとえ忠義に焦点をおいて描いているにしろ、それは子の愛に裏づけられて描かれているということであり、それによって「寺小屋」は徳川時代の人間の典型を描くと共に、文学でありえている。つまり「古典」でありえているということになる。われわれがこれに感動するのは、忠義との板ばさみに追いこまれてぎりぎりの場で苦悶する千代の、人間としての悲しみに対する共感からであると思う。

あるいはこう考える人もあるかもしれない。子への愛が忠義に負けて「嘆く」という形で表現されているところが物足らない、むしろ忠義に打勝ってゆくようなものにすべきではないかと。なるほど現代の劇ならばそうかもしれないが、しかし封建社会を背景とした寺小屋で、そういう脚色をすることはうそになる。少くともあまい芝居になる。封建社会の現実は、そんなにあまくはないからである。封建社会の無慈悲さをそのまま無慈悲さとして描き、子への愛はそれに打負かされて嘆きという形でしか存在しえないような、徳川時代の人間のあり方を描いたリアリズムの精神が、むしろこの「寺小屋」の感動の根元になっているのである。古来すぐれた文学は皆、人間をおしつぶす悪や対立物の強さの方を、むしろ忠実に描いているではないか。そしてそれは悪や対立物を肯定するからではなく、それから人間を守ろうとするためである。文学の任務は、問題の提出であって、解決ではない。解決は現実の人間自身がしなければならぬ。文学者がこの限界を越えて作品の中で解決を試みる場合、あまい夢物語に終る危険は、避けがたい。人間の問題の「解決」は、小説の中で可能なほど甘いものではないからである。

子に対する愛に限らず、人間愛が文学の根本的な、時代によって変ることのない主題である。ここにわれわれが古典を自分のものとして理解し、共鳴しうる根拠があるのであって、たとえ時代による社会的環境や思想の相違はあっても、人間とそれの対立物との具体的な対立関係を理解することによって、言いかえるとその時代の人間の立場に身を置くことによって、現代文学と同じ関心を持つことが出来る。その関心は、自分以外の隣人や外国の人の問題に対して持たれる関心と異質的なものではない。他人の立場に身を置いて、その人の問題を自分の問題として理解し考えるという、文学鑑賞の行為としては、現代文学も古典文学も、外国文学も、何ら相違はないと云えるであろう。

2

万葉は抒情詩であるから、歌舞伎や小説のように、人間がその対立物との関係において描かれることはない。そこではもっぱら作者の人間としての喜びや悲しみのみが、短

歌（又は長歌）の形式で表現される。だから万葉の歌を理解するためには、万葉の作者たちが置かれた社会的個人的環境を、具体的に知っておくことが必要になる。

現身の人なるわれや明日よりは二上山を
いろせと我が見む。

この歌は大伯皇女の歌であるが、歌詞だけでは意味の理解さえ困難であろう。が、万葉集にはこの歌の作られた時の事情が詞書に記されていて、それによると大津皇子の屍を二上山に移葬した時の作である。大津皇子は皇女の同母弟で、つまり弟の死を悲しんだ歌であるが、しかしそれだけではないので、皇女の悲しみの背景にはもっと重大な事件があった。大津皇子は父天武天皇が崩じて一月にもならぬ内に謀反の罪に問われて、ろくすっぽ訊問も受けることなく処刑されてしまったのである。皇女は前から伊勢神宮に斎宮として仕えて居り、皇子は事件の前ひそかに姉宮に会いに伊勢に下ったらしい。その時の皇子を見送る歌も皇女は詠んでいる。そして処刑が行われてから一月余りして、皇女は京に呼び戻されたが、その時の歌が「見まくほり吾がする君もあらなくに何しか来けむ馬疲るるに」である。十五才の時から二十六になる今まで伊勢で淋しい生活を送って、やっと京に帰ることが出来たのは、まだ若い皇女にとっては喜びでなければならぬのに、「何しか来けむ」と歌わざるをえなかったのも、かけがえのない弟を、皇位継承をめぐる暗闘の犠牲にしてしまったことの悲しみからである。反対勢力のために殺された大津皇子は、懐風藻に「状貌魁梧、器宇峻遠、幼年にして学を好み、博覧にして能く文を属す。壮に及んで武を愛し、多力にして能く剣を撃つ。性頗る放蕩にして、法度に拘らず、節を降して士を礼す」とあるような、まさに帝王の風格を具えた人物で、天智天皇に愛されたり、宮廷の貴族たちも心を寄せたりしていたらしい。

大津皇子の人物について、又その死について、そして皇女の歌が作られた事情について、このようなことがらを知って読む時、「現身の人なるわれや」の歌にこもる悲しみと、皇子に対する愛惜の情は、名状しがたい感動をわれわれの心によび起こさずには居ない。そしてこの歌から感じ取られるものは、悲しみとか、愛惜とか、そういう抽象的な言葉ではとうてい言い表すことの出来ない、もっと具体的で濃度の濃い情緒である。それは歌の言葉そのものから直接受取るよりほかないもので、口訳したり、外の言葉で説明するのは、便宜的な手段以上には出ない。

これは一例に過ぎないが、万葉の面白さ、というものは大体こんなものであると思う。私は現代の小説も面白いが、万葉の歌もたまらなく好きである（全部の歌がそうだというのでは、もちろんない）。が、考えてみるとその面白さを理解するためには、歌詞の中に表されていない歌の背景を具体的に知っていなければならぬし、情緒のゆらぎを表現する微妙な言葉の陰影が理会されねばならぬ。だから現代文学と異った予備的な作業が必要で、文学の面白さは古典の場合、学問の裏付けを必要とすることになるが、それは大体学者たちがやってくれているから、それを手がかりにすれば、万葉の歌の面白さを理解することはさして困難ではないと思う。また歌の生命は小説と違って――ないし小説よりも――言語表現そのものにあるから、歌の面白さは、歌そのものを読んで感じ取るよりし方のないものであるが、言葉による微妙な表現を辿りつつそこに表現された情緒のゆらぎを正確に理解することによって、作者の生きた生命にふれることが出来る喜びや面白さは、小説などでは得られない性質のものである。それは小説よりも努力を必要とするが、その努力は必ずあとで、よろこびによって報いられるものであることは、信じていただいていい。「万葉の面白さ」についての話というより、万葉の面白さを面白さとして受取るためにはどうしたらいいか、というような話になったが、このことが分れば、「万葉の面白さ」の方はひとりでに分かってくる。その方が「万葉の面白さ」を効能書き風に並べ立てるよりも、却て実際的なのではないかと考えたのである。